巻　頭　言

「自己表現」という文字をみていて，ふと，この四文字に対して幾通りかの読み方ができるような気がした。

「自己表現」とは ＜自己を表に現わす＞ と読むこともできるし，また ＜自己が表に現われる＞ と読むこともできそうである。先の読み方をすると，その前提として，現わす主体としての自己と現わされる客体としての自己とが想定されているようである。つまり主我と客我とが存在し，その主我が，既にそれが何物であるかを把握した限りにおいての〝自己〟というものを他者の前に意識的に提示するといったニュアンスがある。われわれが「自己表現をする」という言い方をする時には，その様な考え方が前提としてあるのであろうか。

他方 ＜自己が表に現われる＞ という読み方をしてみると，〝自己〟と名づけられたものが，それまでは現われていなかったのだが，ある時他者の前に立ち現われてくるといった感じである。表層の自己に対して深層の自己とでもいうものが想定されていて，それがいつどの様に現われてくるかは当人にとってもわからないというわけである。われわれが「自己表現になっていた」という言い方をする時にはその様なニュアンスが感じられる。

ところでもう一つの読み方があるように思われる。＜自己は表に現われている＞ と読むとどうであろうか。つまり，自己はどんな状況の中でも常に表に現われているというわけである。〝いまここ〟の一瞬一瞬に現われているものが紛れもなく自己そのものであり，それは，する・しない，できた・できなかったという様な結果としての自己表現ではなくて，「プロセスとしての自己表現」として捉えられる。それ故にここでは，常にそこに起こっているプロセスに〝気づくか気づかぬか〟が問題となってくるのである。

さて，「自己表現」をどの様に捉えるのかということについて，我々自身も充分な議論をしたことはなく，暗中模索といった段階にいると言わざるを得ない。この特集では，自己表現を通して人間理解・自己理解を深める様々な意欲的な試みが報告されているが，これを契機として，それらの持つ人間観・自己観の検討をも含めた，さらに深い思索と実践とが促進されることを願っている。

山　口　真　人